

## 野牛もいた江戸時代の大島 文明開化でピンチヒッター

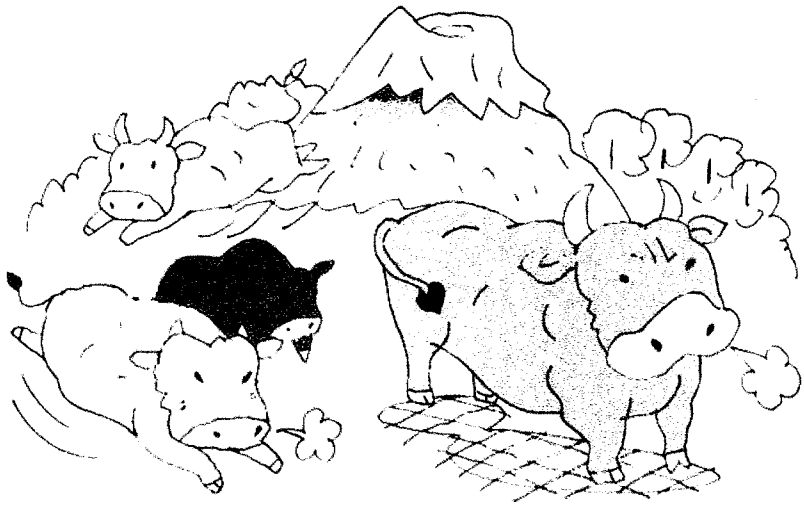
東京のほぼ南、百二十キロの海上に浮かぶ伊豆大島は、いまから三百年前の江戸時代には、幕府の天領として江戸町民の台所の役目を担っていた。

いまはすっかり観光の島と化してしまっただが、享保九年（一七二四）幕医の野呂元丈が記した「大島見聞録」によると、当時、差木地、泉津、野増の三村には、戸数にして百三十戸、四百十人の住人と、馬百九十頭、牛二百四十頭がいたという。

これは、同島の牛馬についての最初の記録だが、その他の伝承や資料などから察すると、牛馬のほとんどは野生に近く、それを必要に応じて荷役や農耕などに使い分けていたらしい。

関ヶ原の合戦のあと、天下の大將軍となった家康は、戦国時代の教訓にかんがみ、塩の重要性に着目、江戸周辺での製塩地の確保と振興に乗り出した。

その一環として、大島を天領とし、前記の三村に塩づくりを命じたのだが、そのための「塩木」（塩釜のための燃料）の運搬に当たったのがこの島の牛や馬たちだった。但し、この塩づくりは、後に関西の製塩業に圧倒され、江戸薪と称して、江戸町民への燃料供給へと切りかえられるが、いずれにしても、この島の牛や馬たちにとって「燃料運び」の労役はほとんど宿命のようなものだった。



それはそれとして、この大島では、はじめ伊豆地方から持ち込まれた牛が、ほとんど野生状態で放牧され、その結果、自然繁殖したものを適宜に捕らえて飼いに仕立てて来たという。

その野牛がほとんど狩りつくされたのが明治のはじめで、例の文明開化で牛肉ブームが起ころ、横浜など、内地の需要をまかなうためのピンチヒッターにされたのだった。

それでも、明治十二年、大島には飼い牛として九百九十九頭が「舎育」されていた。

うち牝牛の数はほぼ相半ばし、他方、馬は島内合わせてもわずか八十二頭。牛馬合わせても千八十一頭では、各戸一頭当たりを飼うもわずかに六十五頭を残すのみ」と古老の聞き書きは伝えている。